

北上市文化交流センターさくらホールにおけるコモンスペースに関する研究

正会員 ○小塚 智世*
同 加藤 彰一**劇場 コモンスペース 環境行動
練習室 マッピング サードスペース

Abstract

A Public Theater is attracting much attention as a place to facilitate creative activities of the local community. This paper focuses on new features of lobby areas, or common spaces, at a new theater, and shows the analysis of user behaviors in exercises during the performance in a case study of Sakura Hall at Kitakami City.

1. 背景

我が国の劇場の変遷として、戦後の多目的ホール建設、80年代後半以降の専用ホール建設、近年では上演に至るまでの創造活動や、創造活動を通じた地域との関わりを重視するパブリックシアター¹⁾が注目されている。

様々な劇場計画に伴った、利用者の多様な過ごし方に対応可能な劇場環境が求められている。特に、ロビーやホワイエ、その他のコモンスペース²⁾(以後、CS)は有効活用が求められており、市民の文化活動や交流の場として、計画段階や管理運営上留意すべき空間である。

2. 目的

本研究では、物的要素の充実したCSがあり、市民の活動が日常的に活発に行われている劇場を調査対象とする。劇場のCSにおける利用者の滞在行動に着目し、多様な過ごし方の確認、滞在行動と劇場の空間構成の関係について考察する。また利用者にヒアリング調査を行い、意識調査を行う。以上を通して、利用者の求める劇場環境に対する計画指針を得ることを目的とする。

3. 調査対象および方法

調査対象は、北上市文化交流センターさくらホールとする。調査対象の特徴を以下にあげる。

①配置計画：アートファクトリーと呼ばれる練習室群が中央にあり、それらを囲むように大ホール(固定席1310)・中ホール(固定席450)・小ホールが配置されている。配置上、大・中ホールのホワイエとアートファクトリー間に見る・見られるの関係が生じる。

②練習室計画：大小22の各練習室は、レベルの異なる配置とガラス張りのファサードにより、活動者の練習や創作活動を可視化している。練習室とCS間に、日常的に見る・見られるの関係が生じる。

③CS計画：テラス、植栽、トップライトにより半屋外化したCSが計画され、一般開放性が重視されている。椅子4個と机1個で形成されたソシオペタルな家具配置である。

表1 CS家具寸法

形態	家具	
	机	椅子
高さ	720	450
幅	800	400
奥行き	800	400



図1 家具配置例

調査方法は、ヒアリングとマッピングの2種類行う。調査日は、公演が利用者にも与える影響の有無について把握するため、公演が行われる日に選定した。中ホールにて行われた「韓国楽器のための伝統・現代音楽コンサート」公演前後の19:00~19:30、21:00~22:00に、15分おきのマッピングにより、CSにおける利用者の滞在行為の把握、行為に影響を与えている物的要素の抽出を行う。ヒアリング調査概要について、表2に示す。

表2 ヒアリング調査概要

対象	ミュージックルーム2 アクティブルーム 大アトリエ アンサンブルルーム1,2 トレーニングルーム スタジオ&ミキシングルーム テラス
期間	2009.08.28 20:00~22:00
方法	対面によるヒアリング調査
ヒアリング項目	・利用頻度 ・カーテンの開閉と他者の視線に関する意識 ・他のグループとの交流の有無 ・北上市文化交流センターで活動している理由 ・他の劇場と併用しているか ・劇場利用全般に対する自由意見

4. 調査結果

4-1. ヒアリング調査結果

利用頻度に関して、スタジオ&ミキシングルームを例外として、最低でも週1回は通っており、「毎日」や「週5回」の回答からもリピーターが多いといえる。

練習室の活動の可視化に関して、9グループ中8グループが「他者の視線は気にならない」と回答した。活動者は、練習の段階から発表を見据え、他者に活動を見せようという自発的なパフォーマンスが日常的になされていると考えられる。ただ、視線への意識や考え方には個人差があり、劇場利用への慣れが影響しているといえる。

他のグループとの交流に関して、「イベントを通しての交流がある」や「共に活動したい者と出会う機会がある」との回答が、一部のダンサーにより得られた。

劇場利用全般に対する自由意見では、劇場スタッフと利用者間の接触や、高校生にとって劇場における他者との接触の多さを確認する意見が得られた。

4-2. マッピング調査結果

アートファクトリー1階2階の利用実態を図2図3に示す。CSにおいて見られた行為内容の7割は、会話である。5人以上のグループは、1グループ2テーブルといった使い方、椅子の移動により、対応していた。混雑時には、床に座っての会話も見られた。アクティブルーム、アンサンブルルーム1前は、保護者が活動者を見守っており、会話による待機が多く見られた。また、行為内容の1割は自主学習である。ロールブラインドや壁により視界の正面が閉じられた座席、他の座席と距離がある座席を選択しやすい傾向にある。荷物による場所とりも見られ、各自がより集中できる学習ゾーンを形成していた。その他の行為内容としては、多く見られた順に、演奏等の音楽活動、携帯電話使用、巡回、ダンス、目視である。

5. まとめ

利用実態と利用者の意識調査から、調査対象の特徴が利用者の行動に与える影響について、以下に述べる。

- ①配置計画：今回、ホワイエの利用実態について十分に把握できていない。
- ②練習室計画：ガラスのファサードによる活動の可視化は、個人差はあるが、活動者にとって気にならない。特にダンサーにとって、新たな活動メンバーとの接触やダンス技術に対する触発につながりやすいと考えられる。
- ③CS計画：場の特性として、第一に手すりやガラス面等の建築的要素の充実がある。座り込みやもたれながらの姿勢によって、会話や活動を眺める目視行為を誘発し、キーパーソンを囲むヒト拠点の滞在が見られた。第二に、家具やロールブラインド等の付属的要素の充実がある。グループごとの領域を形成しやすく、図に示した通り、モノ拠点、家具を利用した滞在がほとんどであった。以上より、ガラス面の多用、家具を含む物的要素が利用者の滞在行动に与える影響が大きいことが確認できた。

尚、劇場には活動内容や年齢層の異なるグループが混在しており、相互に影響を受けていると考えられる。

劇場内のCSの特徴として、一般開放性があり、リピーターが多く、飲食やゲームが可能な雰囲気であり、会話が主の行為内容であることから、調査対象はOldenburgの定義するサードスペース³⁾の特徴を含んだ空間だといえる。今後、文化活動を核とした市民のサードスペースから、地域独自の創造活動が生まれることが期待される。

謝辞

本研究の調査にご協力頂きました、株式会社久米設計の野口秀世氏、兒玉謙一郎氏、北上市文化交流センターさくらホールの千田敬氏、野坂ゆきえ氏をはじめ劇場スタッフの皆様、サイモン・ハッチソン氏をはじめ出演者の皆様、劇場利用者の皆様に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

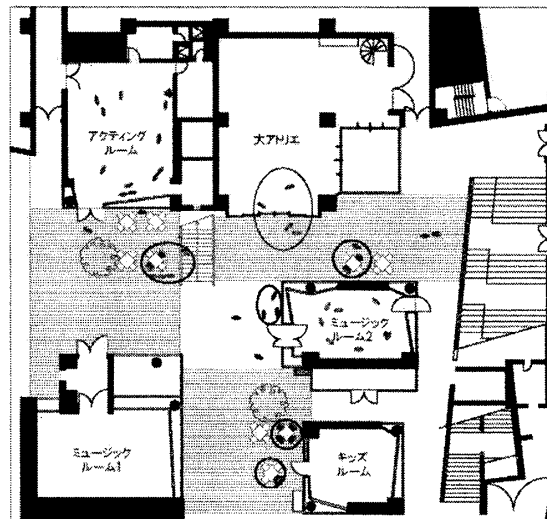


図2 アートファクトリー1階利用実態

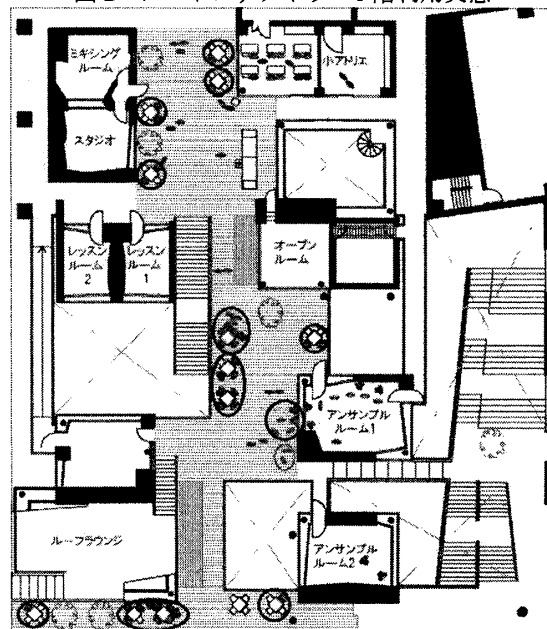


図3 アートファクトリー2階利用実態

注

- 注1) 「パブリックシアター」という用語は、清水の著作本(文1,2)の中で、「舞台芸術をととして公共圏の形成を目標とする」次世代の公立文化施設のことを示す。舞台芸術という芸術行為を通して人々が地域との関わりを考える場であると定義されており、本稿でもこの定義を使用する。
- 注2) 本稿における、コモンスペースは、ロビーおよび練習室まわりのフリースペースと定義する。
- 注3) 本稿における、サードスペースは、oldenburgの著作本(文3)の中で、第三の憩いと交流の場、インフォーマルな集まりの場と定義されており、本稿でもこの定義を使用する。

参考文献

- 1) 清水裕之：「21世紀の地域劇場 パブリックシアターの理念、空間、組織、運営への提案」鹿島出版社 9907
- 2) 清水裕之編著：「わたしたちと劇場」芸団協出版社 9307
- 3) RAY OLDENBURG: 「THE GREAT GOOD PLACE」Da Capo Press 9908

*三重大学大学院工学研究科 博士前期課程

**三重大学大学院工学研究科 教授・工博

* Graduate Student, Graduate School of Eng., Mie Univ.

** Prof., Graduate School of Engineering, Mie Univ., Dr.Eng.